

## 終章：持続的な質保証と利他共生の深化に向けて

2025（令和7）年度の自己点検・評価報告書の刊行にあたり、最後に、本報告書の総括と今後の展望を述べさせていただきます。

本学は、建学の精神である「利他共生」を教育研究の根幹に据え、大乘仏教の精神に基づく人間開発・社会開発への貢献を目的として歩んでまいりました。この理念を現代社会においていかに体现し、学生一人ひとりの成長へと繋げていくか。その問いに対する本学の真摯な向き合いが、本報告書に記された諸活動の記録であると考えております。

本年度の点検・評価活動において特筆すべきは、内部質保証システムのさらなる実質化への取り組みです。2023年度から開始された「第4クール成果指標」に基づき、大学自己点検・評価委員会による定期的な進捗状況の確認と、内部質保証推進委員会による課題抽出のサイクルが定着しつつあります。また、評価基準のばらつきを抑えるための「達成度評価基準」の策定や、評価実施年度の適正化など、より客観的で実効性の高い仕組みへの改善も進められました。

教育面においては、全学共通基礎教育科目「S-BASIC」の導入により、建学の精神を学ぶ「利他共生」を必修化し、本学のアイデンティティを基盤とした教育体系の構築を図ってまいりました。また、社会福祉学科における新コースの設置検討や、数理・データサイエンス・AI教育の推進など、社会の要請に応えるための不断のカリキュラム改革も進んでおります。

一方で、外部評価等を通じて明確になった課題も少なくありません。特に「淑徳大学の特性や強みの発信」については、ホームページのリニューアルやSNSの活用、研究成果のアウトリーチ活動の強化など、ステークホルダーへの情報伝達をより分かりやすく、手軽に届けるための仕組みづくりが急務となっています。また、教職員の業務負担の平準化や管理運営業務の効率化といった教育研究環境の整備についても、組織的な対応が必要な段階にあります。

2025年度は、大学創設60周年の節目を迎えるとともに、大学基準協会による第4期認証評価が行われる節目の年となりました。これに合わせ、今回の報告書は、これまでの報告書の形式を刷新し、認証評価の評価基準に沿った項目立てとし、学内での自己点検・評価と認証評価とがより連動するよう工夫をいたしました。

点検評価においては、単なるデータの集積や報告書の作成・公表に留まることなく、これらの分析結果を「改善」という具体的な行動へと繋げていく必要性を強く感じております。教員と職員、更には学生とも一体となり、自ら省み、自ら高める「質保証の文化」を学内に深く根付かせることで、学生自らが自身の持つ可能性を最大限に開花させ、「他者に生かされ、他者を生かし、共に生きる」利他共生の実践者として社会において貢献できるよう、全学一丸となり、改善を進めていきたいと考えております。

最後に、本報告書の作成にあたり、ご協力をいただいた教職員の皆様、ならびに貴重なご意見を賜りました外部評価委員及び学生の皆様に、心より感謝申し上げます。

淑徳大学 評価・IR室長 大橋 靖史